大阪万博 レガシー暗雲

大阪・関西万博について、最近のニュースとして朝日新聞1月6日朝刊の表題記事を抜粋して紹介する。

大阪府・市などが出資する展示館「大阪ヘルスケアパビリオン」の特殊な屋根が閉幕後にすべて撤去されることになった。特徴的な構造の屋根は展示館の大きな「売り」。展示館は、閉幕後も一部が残される現時点では唯一の建物で、万博のレガシーとしても注目されているが、地元議会からは今回の方針を疑問視する声も上がっている。展示館は2階建てで楕円形の建物が部分的に重なり合うような構造。なかでも特徴的なのが、網目状の透明な屋根だ。昨年6月のデザイン発表時には吉村知事が「光や風、水に包まれた非常に幻想的でユニークな外観」と胸を張った。閉幕後も屋根も含めた建物の一部を残す予定だった。

だが、昨年12月の大阪市議会での担当部局の説明で一転して屋根は残さない方針であることが明らかになった。原因は、屋根の大幅なコストカットのためだ。府市の合同部局である万博推進局によると、万博後も残すのは楕円形の建物の一つで「ミライの医療」(1階)と「ミライのヘルスケア体験」(2階)の展示ゾーンが入る。しかし、現在の設計計画では、その建物に特徴的な屋根がかからない。展示館の建設をめぐっては、府市が当初提示した参考額は74億円だったが、公募に応じた事業者の提案額は約2.6倍の195億円。そのうち屋根部分は約5倍の74億円に跳ね上がった。屋根の構造に対する府市の見積もりの甘さに加え、物価高騰も影響した。府市は屋根素材のガラスを透明な膜に変えたり、来場者から見えない部分は平屋根にしたりして99億円（屋根部分は24 億円）まで費用を圧縮(写真上)。その結果、当初は建物全体に架かるはずだった屋根が、万博後に残る建物からはなくなった。

昨年12月の市議会では自民党の市議が、太陽と塔を引き合いに「(開催中の形が無くなるなら)記憶の継承が難しくなるのでは」として、残し方の妥当性をただす場面もあった。同局の担当者は「新しいものを生み出す卵から着想を得て楕円形の建物にした。パビリオンのテーマに込められたイメージは一定継承される」と答弁。松井市長も記者団に、「レガシーは訪れてくれた人であり、そこでつくった技術であり、サービス」と説明する。

万博の会場建設費は1850億円。運営主体の博覧会協会によると、参加各国や民間事業者などのパビリオンが建つ予定だが、いずれも万博後には原則撤去される。

(2023年1月9日)